

「どうしたんですか、樋口さん？ 眠るならお布団を用意しますよ？」
声をかけられてハッと目を覚まし、自分が家に居ることを思い出す。

隣に座る部下の瑞樹さんが、前髪をかきあげて眉を八の字に垂れさせ、こちらを覗き込んでいる。心配させてしまったらしい。と申し訳なく思いながらも、彼女の涼やかな茶色い目に見惚れてしまう。

会社ではスーツ姿しか見たことがなかったが、今夜の瑞樹さんは黒のノースリーブニットに白のロングスカートと、可愛らしくてラフな服装に身を包んでいる。そのファッションは彼女の持つ瀟洒な雰囲気と若々しさに大人びた色気を含ませ、私は年甲斐もなくドキドキしてしまう。

(それにしても……)

普段の服装でも男性社員の注意を引いていた彼女の大きな胸に、私の視線も吸い込まれてしまう。

真っ白な腕をあられもなく晒している彼女の、やわらかそうな二の腕や腋についつい目が惹かれる。

妻を亡くして以来、一人息子を育てるべく働き詰めで女性との付き合いは仕事上のものしかなかった為、すっかり免疫を失っているようだ。

「お布団、出しておきましょうか」

三つ編みにして束ねた髪を尻尾のように揺らし、瑞樹さんは立ち上がろうとする。

「いやあ、悪いよ」

酒が進んだせいでソファに座ったままうっかり眠ってしまったのだろう。目がシパシパとし、頭はぼんやり働かない。断りしたものの、本当に眠るのなら布団を出してもらおう必要があるかもしれない。

「じゃあ、少し私に体を預けていいですよ。こう見えて、男性を支えるのは慣れていきますから」

「ははは。僕が瑞樹さんに支えられる日が来るとはね。耄碌したかな」

「もう。私がしっかりした、とは思ってくれないんですか？」

「君は前からずっとしっかりしていたからねえ」

入社当初から自分の下で働いてくれていた彼女は、同期どころか上の世代と比較しても抜きん出た存在だった。有能なのはもちろんのこと、見目麗しく、さらに人間関係の立ち回り方や身の振り方が抜群に上手い。その能力を買って下に置いていた為、付き合いはそれなりに長くなる。

(彼女の入社当初からの付き合いだから……)

そこまで考えたところで、ぎゅ、と優しく隣から腕を回され、思考が途切れる。相当酔ってしまったらしい。やわらかな二の腕と胸の感触にどきりとしてしまったのがその証拠だ。

「すまないね」

「いえいえ。樋口さんにはたくさんお世話になりましたから。本当に、今までお疲れ様でした」

妻を亡くした後、一人息子を東京の大学まで通わせた私は、今日で三十数年に及ぶサツリーマン生活にピリオドを打っていた。

すっかりオールドグレー一色になってしまった髪を鏡の前で整え、節くれ立った指で細首にネクタイを結ぶ日々も終わりを迎えたのだと思うと、些か寂しさを覚える。

(ボケやしないかだけ、心配だな)

定年より少し早い、円満退社。自分一人で生きていくには二十分、息子の学費を引いてもまだ余裕のある蓄えを作ったのもあり、体が元気な内に第二の人生を歩み出そうと考えた結果だった。

(と、言うのは少し格好つけ過ぎかな)

退職祝いの席が自宅で、しかも部下の瑞樹さんと二人だけという状況が物語るように、私は決して人望の厚い人間ではない。

以前はそんなこともなかったのだが……つまるどころ、失脚したのだ。派閥争いに負け、社内においての地位——役職ではなく、人の輪の中という意味で——を失い、居心地が悪くなったところで、早期退職制度を用いて長年勤めた社を退いたのである。

(瑞樹さんに背中を押された、というのもあるけれど)

定年まで勤める場合よりも多額の退職金を得られる早期退職を勧めてくれたのは、他でもない彼女だった。

部下として長く、濃い付き合いのあった彼女に「もう十分頑張ったんですから、ゆっくり過ごしましょう?」と言ってくれたのをきっかけに、一線を退く決意を固めたのである。

(部下に退職を勧められる上司になったら、退くのが潔いというもの……)

ふ、と誰にともなく笑ってみせ、グラスに半分ほど残ったビールをあおる。

「しかし、悪いねえ。わざわざ僕のために」

一部下でしかない瑞樹さんがこうして退職祝いに駆けつけてくれたことはありがたいが、一方で申し訳なきは覚える。

「いいえ。気にしないでください。私がやりたくてやったんですから」

本当は、こんな祝いの席すら設けるつもりではなかった。ひっそりと姿を消し、一人で過ごす予定だったのを「お世話になったお礼がしたい」と彼女の方から持ちかけてくれ、こうして自宅でささやかながら酒宴の席を開いたのである。

(それにしても、何故……)

瑞樹さんの華奢な身体にもたれかかり、甘く、華やかな香りを嗅ぎながら思考する。

(もしかして私に気があったり、なんてね。こんなおじさんに……)

しかし、アルコールからくる酩酊か、彼女のふんわりとした甘らかな香気のせいか、考えがまとまらない。

そもそも自分はそのまで酒に弱い人間ではなかった。アルコールで酔った時特有の感覚はない。これでも飲み会文化真っ盛りの昭和からサラリーマン一筋だったのだ。肉体の全盛期はとうに過ぎたとは言え、自分の酒量や酩酊時の感覚は把握している。

(となると……)

そこでようやくよく自覚して、我が事ながら笑ってしまう。私は、瑞樹さんの放つ香気に酔ってしまっているのだ。

などと考えていると、もぞもぞと隣で瑞樹さんが身を動かす。邪魔になってしまっただろうか、と思って身体を離そうとすると腕を回され、抱き寄せられる。

「はい♡ 枕を♡用意しましたよ♡」

側頭部に感じる、むにゅっとしたやわらかな感触。それだけで、自分が瑞樹さんの胸部に頭を置いているのがわかってしまう。

「み、瑞樹さん？」

「ダメです。じっとしててください♡」

私が驚いて身体を起こそうとしたのを、瑞樹さんは頭に腕を回して阻止してくる。

頭部に感じるニットの生地とふんわりとした胸の感触、首と頬に覚えるやわらかな肉感はこの腕のもの。

長らく触れていなかった女体の肌触りに、私は急に興奮を覚える。

(あいつに悪いな……)

一瞬、泣き妻のことが脳裏に浮かぶも、次の瞬間には現実で感じる女体の感触と芳しさに意識が向く。

むにむにとしたこの腕とふわふわの乳房のやわらかさ。鼻腔をくすぐる甘らかな香りは、仄かに桜色に染まった瑞樹

さんの腋から漂うもの。ノースリーブのニットを着ているために素肌同士が密着していたせいで、熱が籠ったのだろう。

その熱とともにじんわりと伝わってくる芳香に、アルコール以上に心地良い酔いを覚える。

「よしよし♡ いい子いい子♡ 本当に、お疲れ様でした♡」

柔和な声。聞いていると心がほぐれ、呼吸が深く、ゆったりしたものになっていく、温かな声だった。

(彼女の声はこんなにも温かいものだったろうか……)

仕事中に何度も聞いたことがあったのに、安らかな心地を覚えたのは今日が初めてだった。酒の席だからか、サラリー

マンという三〇年以上着込んでいたスーツを脱いだ為だろうか、彼女の声は私の心の奥深くにじんわりと染み込んでく

る。

「くすくす♡ 樋口さん、そんな顔もするんですね♡」

言われて、こそばゆさを覚える。しかし、嫌な気分ではない。むしろ、他人には見せない顔を彼女の前で曝け出せてい

ることに安心感のようなものを覚える。

「とつても可愛い顔、しっちゃってますよ?」

続けて瑞樹さんが口にした言葉に、いつそう心が安らいでいく。緊張感と身体力が抜けていき、自然と深呼吸をしよう。

花の蜜とミルクを混ぜたような、甘い匂い。呼吸の度にそれを嗅いでしまい、徐々に興奮と安らぎが強くなっていく。身体力は抜け、頭はぼんやりしているのにやけに瑞樹さんの声と匂い、肉感のはつきりと感じ取れる。

「私の胸、甘い匂いがしますよね? 男の人をドキドキさせちゃう、おっぱいの匂いなんですよ♡」

ああ、だからか……と納得してしまう。

瑞樹さんという女性は、男を惹きつける、可憐な華。髪からも腋からも、そして胸からも彼女の芳しい香りが漂い、私を酩酊させる。

自分が瑞樹さんの香りに包まれていることを自覚すると、言いようもない胸の高鳴りを覚えた。興奮とはまた別種の、懐かしい切なさを伴うときめきのような感情。

「ひ・ぐ・ちさん♡ 私のおっぱい、もっと楽しんでくれて良いんですよ?」

瑞樹さんの言葉と胸のときめきに導かれ、自分から彼女の豊満な胸に頬を擦り付ける。

ニットの生地の上からでも確かに認められる、乳房のやわらかな感触。軽く頬擦りしただけなのにふよんふよんと波打つ胸の虜になってしまう。

(もっと嗅いでいたいな……)

ぼんやりとした脳みそで、そんなことを思う。身を振り、側頭部ではなく顔を胸部に押し当てると甘い匂いはより強く感じられた。

「あらあら♡ 会社ではかっこいいのに、お家では可愛いんですね♡ 歳下の部下のおっぱいにこんなに甘えちゃうなんて♡」

さつきまでよりさらに甘く、安らかな声色で瑞樹さんが言う。彼女の言う通り、私は豊満な胸に甘てしまっている。軽く体重を預けただけで、ふにゅんと簡単に顔が沈み込んでしまうほどやわらかな乳房。ニットの生地に包まれていてもこれほどのやわらかさなら、直接触れたらどれほど心地良いのだろう、と夢想してしまおう。

「もうちょっとこっちの方……谷間だから、もっと良い匂いしますよ？」

むぎゅっと私の身体を抱き寄せた瑞樹さんが、胸部の中央に私の顔を引き込む。

ほとんど彼女の腕に抱きかかえられる形になり、先ほどまでより深く乳房に顔を沈める。

(ああ……♡)

うっとり、甘い匂いの芳しさに溺れてしまおう。

花の蜜のごとく甘く、引き寄せられる香り。鼻腔の疼きに従ってねだるように顔を擦り付けると、胸の谷間から漂う濃甘な匂いを胸いっぱい吸い込めた。

「甘くて、甘くて、甘あい……おっぱいの匂い、だんだん胸が切なくなってきたちゃいますよね？」

無言でこくり、と頷いて答える。やわらかなおっぱいはその僅かな動きでもたゆんと揺れ、芳香を漂わせる。濃厚な甘さは、私に百合の花を思わせた。

思えば、女性の胸に顔を埋めて甘えるなんて、一体何十年してこなかっただろう。妻にさえこんなふうには甘えたことはなかったはずだ。

「嗅いでいると胸が切なくなつて、ドキドキしてきちやいますよね？ でも、もっと嗅ぎたくなくなっちゃいますよね？ 心がくすぐたくなつて、私に甘えたくなくなっちゃいますよね？」

私はまた、頷いて答える。もう胸の切なさには抑え難く、瑞樹さんの胸に顔を埋めて甘い匂いを嗅ぐのはやめられない。どうしようもないほど、彼女を求めてしまっていた。

「そうだ♡ 私、実はここまで車で来たのにお酒飲んじやったんです。仕事の後に着替えてから来たので。だから、今夜は泊らせてもらいますね♡ 樋口さんも、私と過ごしたいですよね？」

こくこくと頷く。できる限りずっと、このまま離れずに彼女の胸に甘えていたい。甘い匂いに溺れていたい。心地よい胸の切なさとは別れたくなくて、そんなことを思う。強く思う。

瑞樹さんの華奢な身体に腕を回し、抱き締める。ニット越しの乳房に強く顔を押し付け、深く、深く、胸いっぱい甘い匂いを吸い込む。

瑞樹さんは答えるように私の背中に腕を回して優しく包み込み、耳元へそつと口を寄せてくる。

「今夜は、二人つきりで過ごせますね♡」

ぼそりと囁かれ、心臓が跳ね上がる。

私はそこでやっと自覚する。この胸の切ないときめきは、恋であると。

年甲斐もなく恋心が芽生えてしまったことを恥ずかしく思っていると、彼女は私の背中に回していた両腕を後頭部ま

で運び、抱き締めてくる。ふんわりとやわらかな乳房に深く沈み込むことになり、私は心がぐずぐずにほぐれていくのを自覚する。

何か、取り返しのつかない何かを失ってしまいそうな予感に導かれ、ほどけていく心をかき集めようとする。

(そうだ、私は、亡き妻に操を立てて……)

そこへ再び瑞樹さんに「奥さんのこと、忘れさせてあげますよ♡」と囁かれ、手が止まってしまう。

そのまま、私の心はぬるま湯に浸した綿菓子のようにとろけてしまった。

「樋口さん♡ お布団、出しましょうか?」

胸の谷間から香る甘い匂いよりも甘い囁き。私は、領きを以って返すことしかできなかった。

※

(ふふ……。こんなに上手くいくなんて♡)

上司であり、獲物である樋口宏之の家で布団の支度をしながら、私は口角が自然と上がってしまうのを抑えられなくなる。

上場企業の役員を務めていながら妻を亡くして以来、再婚の話も恋人の話も出ない彼に近付いたのは、紛れもなく資産目当て。

上司として尊敬できない人では決してなかったが、それ以上に女性関係の話がないことと、独身中年であることの方

が私にとってはよっぽど重要だった。

(今日までお仕事頑張った甲斐があったなあ♡)

彼の部下として働いていたのは気に入られ、取り入るため。だというのに、社内の派閥争いに敗北し、降格や出向はな
いものあらゆるコネや権限を失った時はひどく失望した。

他の人間に取り入るか、どうしようか。身の振り方に悩みながらも、彼の近くに居過ぎた為^レに他の派閥に入り込むこ
とすら難しく、転職さえ視野に入れていたこともある。

でも、私は知ってしまった。ううん、聞き出した。

樋口宏之という男に、多額の生命保険がかけられていることを。

そして、この家と土地を持っているということも。

(あーんなに呆気なく私のおっぱいにメロメロになってたし、あと一押しかな♡)

丁寧に折りたたまれて押し入れにしまわれていた布団を取り出し、畳の上に広げる。居間は洋風のフローリングなのに
寝室は畳敷という、少し古い内装の家だが、気になるようならいずれリフォームしてしまえば良い。

(だって、ゼーンぶ私の物になるんですもんね♡)

彼を籠絡して全ての財産を手に入れ、彼の死後は残された保険金と遺産で遊んで暮らす。夢のような将来の日々を
思うと、上機嫌になっていく。

「樋口さん、お布団のご用意ができましたよ」

準備完了。あとは、完全に私の虜にするだけ。

(奥さんのことも何もかも、忘れさせてあげますよ♡ 私のおっぱいで、ね♡)
ほくそ笑む私に、樋口宏之が「今行くよ」と言葉を返した。

※

「どうぞ、私の体に掴まってください♡」

おぼつかない足取りを見られたせい、寝室へ入った途端に瑞樹さんに抱きすくめられる。

「ありがとうございます」

「いえいえ♡」

実際、足取りは少しふらついていたが、それはアルコールや老いのせいではない。

瑞樹さんが離れてしまったせいでそれまで鼻をくすぐっていた甘い匂いと、顔面で感じていた乳房の柔らかさを失ってしまい、それを求めてしまったせいだ。

(恋をして足取りが軽くなるなんて……。まさかこの歳でね)

そう思っただけでも、浮かれたような心地は変わらない。

本来なら、もっと警戒すべきなのだろう。瑞樹さんのような若く、美しい女性が自分のような中年も超えた男に近づいてくることを。

しかし、彼女の胸の香りや感触を知ってしまった今となっては、警戒心さえ働かない。心の底から強く彼女を求めてし

まう。

「くすくすっ♡ 樋口さん、私の身体に掴まった途端におっぱいに顔、埋めちゃいましたね♡ すっかり気に入ってくれたみたいで嬉しいですよ♡」

瑞樹さんのやわらかな胸に顔を押し付け、そのまま体重を預けてしまう。甘い匂いにあてられて、全身の力が呆気なく抜けていく。

「くす♡ 甘えんぼさんですね♡」

私の身体を抱えて支えたまま、「お布団行きましょうねー♡」と言って瑞樹さんが運んでくれる。その間も、私は彼女の胸の感触と甘い匂いに酔いしれていた。

「んー♡ 私のおっぱい、そんなに気に入ってくださいたのならあ、直接ばっば♡ してあげましょうか？」

抱き合ったまま布団の上に座ると、瑞樹さんがそう言って胸を押し付けてくる。

「もう気づいているかもしれないですけど、今日はブラジャーつけ忘れてきちやっただけです♡ だから、お洋服の中にお顔をしまっけてあげて、直接おっぱい楽しませてあげられますよ？」

むにゅん、とした感触とふんわり香る甘い匂いにドキドキしていた私は、彼女の誘惑で更に強い興奮を覚えてしまう。

「おっぱい蒸れちゃっているから、お洋服の中、とくっても甘い匂いがしますよ♡ きっと樋口さんも、すっごく気に入ってくれると思います♡」

言葉を聞いているだけで香気が強くなったように感じられる。今よりもっと濃い匂いを嗅ぎながら彼女の胸に顔を埋めることができたなら、どれほど幸せなのだろう。

「私のお洋服の中、入りたいですよね？」

顔を胸に擦り付けながら頷く。しかし、瑞樹さんはそれだけでは動かなかった。

「ちやんと口に出しておねだりしてください♡ じゃないとおっぱいお預けですよー？」

お預け、その言葉を聞いて、恥ずかしさを覚えながらも口に出してしまう。

「瑞樹さんのおっぱいを、直接嗅がせてほしい……」

彼女の胸から顔を離し、目を見つめての懇願。まるで、乳飲児が母親に母乳をねだる時のように。

「はーい♡ よく言えましたねー♡ っ褒美に、生おっぱいではふばふしてあげますね♡」

言うや否や、瑞樹さんは黒のニットの裾を捲り上げる。

なだらかな曲線を描いている真っ白な腹部があらわになり、その美しさに見惚れてしまう。

目の前で捲り上げられていくニット。その裾が彼女の乳房の下弦に差し掛かった時、もわあっと靄が立つ。一呼吸しただけで肺を満たす甘い匂いに、私は靄の正体が彼女の胸から漏れた芳香であることを悟る。

「ふふふ♡ 少し、匂い過ぎちゃいましたか？」

百合の花と桃の果汁を煮詰めたような濃厚な甘さの匂いに、股間が痛いほど硬くなる。陰茎に血液が集中していき、ズボンを押し上げるほど膨らんで硬く張り詰めていく。

ここ数年で衰えを感じていた男性機能が、彼女の乳臭に反応して全盛期以上に働いていた。

「ほうら♡ もうすぐおっぱい見えますよ♡ 樋口さんのだ〜い好きさ、私のふわふわおっぱい♡ しっかり目に焼き

付けましようね♡」

嗅いでもうただけでここまでの興奮を覚えてしまう乳房を実査に目にしてしまったら、きっと脳裏に焼き付いて永遠に忘れられなくなってしまうだろう。

そんな予感が確かにあったのに、既に彼女の乳房の虜になっていた私は目を離すことができなかった。

「はい♡ お待ちかねのおっぱいです♡」

裾が完全にまくり上がると、たゆんとひと揺れしながら真っ白な乳房がまろび出る。

生乳に桃の果汁を溶いたような優しい乳白色の肌に、淡桜色の乳輪。桜色の乳先はぷるん、と可愛らしく澄ましている。

「どうですか？ 私のおっぱい♡ 見惚れちゃいました？」

ゴクリ、と生唾を飲み込みながら頷く。こんなにも美しい乳房を目にしたことはこれまでの人生で一度としてなかった。長い乳房は柔らかげに垂れている様子さえ美しく、開いた谷間からこぼれ出る乳臭の濃さは先ほどまでの比ではない。

「さあ♡ どうぞ♡」

惚けている私の前で乳房を持ち上げた瑞樹さんが声をかけてくる。

「お洋服の中、入ってきていいんですよ♡」

その言葉を聞いた瞬間に彼女の胸の谷間に潜り込む。私の顔がすっぽりと胸の谷間に収まったのを認めると、彼女は黒のニットの裾を下ろして私の顔を完全に服の中へしまった。

「ぱふぱふ♡ ぱふぱふ♡ おっぱいフェロモンが籠ったお洋服の中、天国ですね♡ 幸せになっちゃいますねー♡」

ふわふわの乳肉に顔面を密着させると、もちもちすべすべの柔乳肌が吸い付いてくる。どこまでも深く沈んでいけそう

なほどとろとろの乳房に、もにゅもにゅと顔面を揉まれる。

熱気と乳臭が籠もったニットの中は温かく、それが余計に乳房を温めて蒸らす。谷間の奥深くから甘い匂いがこんこんと湧き出してくるのを、私は全て吸い込む勢いで嗅ぎ続ける。

「どんどん脳みそ溶けていっちゃいますね♡ このまま何もわからない赤ちゃんになっちゃいましょうね♡」

甘ったるい乳臭に脳を侵され、どんどん何もわからなくなっていく。わかるのはただ、彼女の胸の中がひどく心地良いということと、男性器がずっと疼いていることだけ。

「安心して良いんですよ？ 樋口さんの生活はゼーんぶ私が支えてあげますから♡ はい、ぱふぱふ♡ ぱふぱふ♡」

じつとりと蒸れて温まった乳房に顔を埋めて甘えていると、瑞樹さんが豊満な乳房でもにゅもにゅと顔面を揉みながら尋ねてくる。彼女の声色は先ほどよりも甘く、くすぐりたい。

「ねー、樋口さん？ 私のこと、好きですよね？ おっぱいから離れたくないですよねー？」

その問いに、私は乳房の谷間に挟まれながらモゾモゾと頷いて答える。

「ですよね♡ それならあ、私もこのお家に住まわせてもらって良いですよね？ お金の管理もしてあげますよー♡ 仕事で慣れてますし♡」

(それは……)

妻と息子との、思い出の地である自宅に全くの他人が住み着く。決して歓迎することのできない提案。流石に断らなければ………と思ったところを強く胸で圧迫されてしまう。

「おっぱいむぎゅー♡ あま〜いフェロモン嗅いで、頷いちゃいましょうねー？ 言ったじゃないですかあ♡ 奥さんのこ

まっている。

「テレビを見ている時も新聞を読んでいる時も、おうちで過ごしている間はずっとおっぱいおむつで包んであげるので、好きなときに好きなだけおもらしして良いですよ♡」

まるで夢のような提案。私は、彼女の言葉全てに頷いてしまう。

「さつきから頷きっぱなしですねー♡ 赤ちゃんだからお首が座ってないのかなあ?」

彼女のそんな挑発的な言葉すら、今の私にとっては興奮を加速させる燃料にしかならない。

(瑞樹さんの、おっぱい……♡)

おっぱい♡ おっぱい♡ 胸の中でその言葉を唱えるたび、自分がどんどん幼児退行していく錯覚に陥る。いや、もしかしたら錯覚ではないのかもしれない。

それでも、構わなかった。私は瑞樹さんのおっぱいに甘えるだけの赤ちゃんになるのだから……♡

とくん♡ とくん♡ ぴゅるるる……♡♡♡ ぴゅくく……♡♡♡

自分が完全に彼女の赤ん坊に成り下がったことを示すように、気付けば自然と吐精していた。証のように、じんわりと下着にもズボンにもシミを作っていることだろう。

「くすっ♡ 本当に赤ちゃんになっちゃった♡ お漏らし我慢できないならあ、ママがおむつを履かせてあげないといけませんかね〜? おっぱいおむつにとろとろぴゅっぴゅ、ちたいでちゅよね〜? 好きなだけさせてあげまぢゅよー♡

樋口さんの持っているものを全て私に管理させてくれるなら、ですけどね♡」

破滅への誘い。決して乗ってはいけない口車。

しかし私はもう、精液と共に理性を全て漏らしてしまっていた。

「おっぱいおむつ……履かせてください……♡」

完全に籠絡され、彼女に全てを明け渡してしまう破滅の言葉を、意識することなく口にしてしまう。

「くすっ♡ はあい♡ ママがおむつ履かせてあげまぢゅね♡」

服の中から出され、敷かれた布団の上に横になることを催促される。私は彼女のおっぱいを名残惜しく思いながらも言われた通りに横になる。

手早くズボンも下着も剥ぎ取られ、射精したばかりのペニスを曝け出される。

「お漏らししちゃっていけない子でぢゅね♡ おむつ履きまぢゅね♡」

ニットを捲ってまろび出したおっぱいを左右の手で持ち、瑞樹さんが身を屈めて股間へと近付いて来る。

「はーい♡ ママがおむつ履かせてあげまぢゅね♡ もうビクビクちてまぢゅね♡ またお漏らししちゃうんでぢゅ

か〜？ いけない赤ちゃんでぢゅね♡」

ふわふわもちもちのおっぱいが、ペニスを包み込んでむにゅん、と形を歪ませる。

射精したばかりだというのに年甲斐もなくそり立つ男根が、やわらかくて温かなおっぱいに閉じ込められ、完全に密閉されてしまう。

男性器だけではない。股間が丸ごと、やわらかくてポリューミーなおっぱいに埋め尽くされてしまう。下腹部ごと股間

を包み込んだ乳房は、言葉通りおむつだった。

「あああ……♡」

この世のものとは思えないほどの心地よさに、感嘆の声が漏れる。

「おっぱいふにゅふにゅ♡ たゆんたゆん♡ 優しく♡い♡と♡ろ♡ろ♡パイズリおむつでぴゅっぴゅしちやいまちようね♡」

たぽ♡ たぽ♡ と左右から瑞樹さんがおっぱいを押し付け、ペニスがむにゅむにゅとやわらかな乳肉にくすぐられ、ところどころと我慢汁を流す。

柔乳肌男根全てに隙間なく密着しているのはもちろんのこと、くびれへと乳肉がにゅるにゅる都潜り込んできて絡みつくのが堪らなく心地良い。

「ゆっくりに優しくむにゅむにゅしてあげて、ところろお漏らしさせてあげまぢゅね♡」

決して強い刺激ではない。強引に愛撫して快感を与えてくるのではなく、ぬるま湯のような優しい快感で鉄芯を溶かしてくる乳撫。

まるで本当に溶かされてしまったかのように我慢汁が止めどなく溢れ出し、じんわりじわじわと精液が尿道を上り出す。

それを止めようとも我慢しようともせず、私はされるがままに精を漏らすのを今か今かと待つ。

「素直でいい子でぢゅね♡ ママのおっぱいおむつにお漏らししちゃいまちようね♡」

たぽん♡ たぽん♡ ふにゅふにゅふにゅ♡

じわじわと上ってきていた精液が、敏感な性感帯をくすぐり回す甘らかな愛撫によって、とうとう吐き出される。

とくんとくん♡　ぴゅっぴゅっ♡♡　ぴゅるる……♡♡♡

吐き出された精液は一滴たりとも乳房の外に出ることはなく、全て谷間の中に収められてしまう。おっぱいによって密閉されていたせいで鈴口を塞いでいた柔乳肉に、吐き出した精液は当たってそのまま谷間からこぼれないのだ。

「はーい♡　お漏らしぴゅっぴゅっ♡　これでもう樋口さんはママの赤ちゃんでちゅよっ♡」

口角が上がり、勝ち誇った表情で瑞樹さんは胸の谷間を開く。胸の谷間を細い糸となって繋ぐ白濁液は、全盛期をとくに過ぎたというのに濃く、大量だった。

これから私は、彼女の乳房に甘えて精を吐き出すことを喜びに、死ぬまで彼女の傀儡となるのだろう。

それでもしかし、構わなかった。彼女のおっぱいによって赤子のように使われるのは幸福なことだと心から感じていたし……。

何より、最も大切なものには手を出させないで済むのだから。

「これからずーっと、私の赤ちゃんでいさせてあげまぢゅねー♡　ママもお仕事辞めるから、毎日朝から晩までママと二人きりでちゅよっ♡」

彼女の声を聞きながら、薄れゆく意識の中で、私は死ぬまで息子の存在を隠し通す決意を静かに胸に秘めた。

※

「貴女は？ 父さんの、何ですか？」

「恋人♡ 内縁の妻、って言えばわかりやすいかな？」

予想通り、彼はあれからほどなくして亡くなった。目論見は的中し、彼は老体でありながら私の身体に溺れ、瞬く間に衰弱してしまったのだ。

でも、たった一つだけ予想外な、いや、知らされていなかったことがあるのを、私は彼の葬式で知った。

樋口隼人。樋口宏之の一人息子で、遺産と保険金の正当な受取人。

(つまりは、私が狙ったものは最初っからこの子に行く予定だったのかあ。流石に一枚上だったなあ)

彼は、男としては私に溺れながらも父親としては立派に仕事を果たしたのだ。悔っていたわけではない。この結果も、彼の仕事ぶりを間近で見ている私としては納得だ。

(でも、どーせ全部無駄ですけどね♡)

彼と同じように息子も籠絡して、私のものにすればいい。遺産だけでなく、この子自身も私のものにするだけ。

「これからよろしくね、ハヤトくん♡」

次の獲物に狙いを定めた私は、自然と口角が上がるのを抑えられなかった。